

ミャンマー（ヤンゴン）旅行雑感（2015. 5. 3～6）

三重県松阪市開業の村田耕一医師は、ミャンマーに学校を作るべく20年近く援助を続けている。過去20回近くミャンマーを訪問しているとのことで、今般帯同させて頂き、初めてヤンゴンを訪問した。以下は、ミャンマー（ヤンゴン）旅行の備忘的雑感である。



1、 第一印象

まず空港から市内に移動する際、停電がここかしこに見えた。電力不足の現状を目のあたりにして、ミャンマーの国情が推察された。しかし大きなホテルやオフィスビルには自家発電設備が完備しており、地域が停電しても、そのビルだけは煌々と電灯が見える光景は面白かった。

市街を歩くと誰でもスマホを携帯していた。30年前の中国やアジア諸国との大きな相違はスマホである。この文明の利器はこれから大きな影響を及ぼすことだろう。街には果物があふれていた。ホテルのビュッフェにはトマト、スイカ、ピーチ、マンゴのジュースが並んでいた。ヤンゴン名物のカレーは、ミャンマービールに合う。そして安くて旨い。

ヤンゴンは昔ラングーンと呼ばれた。5月は、灼熱（42度 3～5月）の季節

で最も熱い。しかし湿度はまずまずで横浜在住の私にはそれ程きつくはなかった。市街には公園が多く、英国植民地の面影が残っている。

ホテル最新事情として、入り口では毎回入館する度に身体と持ち物の検査がある。まさしく空港と同じである。やはり治安上の問題が背景にあるのだろう。

交通は、自動車中心で鉄道はほとんど活用されていない。鉄道路線の上を人々が通勤につかっている光景は面白かった。ヤンゴン中央駅発の本数も非常に少ないようだ。背景はエネルギー不足なのだろうか。道路には、トヨタなど日本車が圧倒的に多いが、この1年でその他の外車も増えている。道路事情として市街は舗装されアスファルトだが、市外はセメント道路で、郊外では赤土の道路になる。50年前の日本と同じである。

2、 民間支援の現場

今回の旅行は、僧院（小学校を兼ねる）への慰問とささやかな援助であった。2000本のボールペンと鉛筆等を贈与した。2つの僧院にはヤンゴンのホテルから片道90分程かかった。当地では裸足の子供が多い。貧しい環境の中で逞しく生きる少年少女に多数出会えた。その眼差しは明るく輝いていた。この感動はこの旅行の最大の収穫であった。



この国の義務教育制度はまだ始まったばかりだ。貧しい家庭の子供は僧院で

基礎教育を学ぶ。僧院は全国に数十万もあるようだ。そこで国語・英語・算数などを学ぶ。教育への情熱は高く識字率は95%という。途上国の国家統計は不正確なのが通常だが、この数値は信じてよさそうだ。英語は5歳から学ぶとのことだ。殆どの国民が英語を話す。しかし会話はスムーズにはいかない。タクシー運転手と会話したが、発音が恐ろしく異なり、聞き取るのに苦労した。

この僧院で学んだ子供達の中から、秀才を選び出し、中学高校への進学させる制度（煙突機能）がある。秀才にはさらに海外留学制度もある。人材育成にNGOの貢献が大きい。ヤンゴンには20余りの日本のNGOが活動している。

主な日本のNGO

	略称	正式名称	活動
1	AMDAMINDS	アドラ・ジャパン	教育支援事業
2	BAJ	ブリッジ・アジア・ジャパン	学校建設
3	BHN	テレコム支援協議会	携帯電話
4	CWS Japan	Church World Service Japan	防災コミュニティ開発
5	KnK	国境なき子どもたち	学校教育
6	NICCO	日本国際民間協力会	少数民族医療
7	OISCA	オイスカ	農林業研修
8	SEEDs Asia	シーズアジア	仮設住宅建設
9	TNF	日本財団	医療教育農業
10	TPA	地球市民の会	有機農業

出所 地元フリーペーパー『ミャンマージャパン 2014/10』

3、 政治経済と歴史

ミャンマーは、8大民族（少数民族を入れると130余）で構成される国である。国立博物館にはこれらの民族の衣装や文化品が展示されている。北の国境に位置するカチン族の地域は、山岳地帯で南部と気候も文化も大きく異なる。そしてミャンマー最大のビルマ族（国民の60%）との紛争が存在する。

山岳から流れる水を利用した巨大水力発電の建設工事が中国の支援で計画されていた。しかし産出される電力の80%が中国に持って行かれる計画だったようで、3年前に政府は中止した。この中止には地元カチン族の不満が絡むようだ。この決定を契機に中国寄りの外交政策から距離をおくようになった。そして西側諸国との関係改善を図り、民主化や規制緩和が少しずつ進んでいる。

なお、日本との歴史的関係は深い。あの戦争で最も悲惨なインパール作戦は当地であり、18万人の英霊が眠っている。また戦後英国植民地からの独立に日本は大きく関与している。

4、経済復興の足音

(1) 対日関係

2013年5月の安倍総理訪問以降、日本のODAは急増している。また過去の借款5000億円は債務免除された。歴史的経緯と最近の投資で、日本と日本人は尊敬され親しまれている。これは経済関係だけでなく、国民気質が日本人に合うように思える。

この2年で現地日本人会の会員は900名余となり、日本商工会議所参加企業も240社と急増している。ヤンゴン中心地に聳え立つ「さくらタワー」は20年前に日本企業が建てた巨大オフィスビルだが、過去は赤字続きであったが、この3年で取り返したといわれている。日本人ビジネスマンは急増しているので、ヤンゴン市内のマンション、ホテル、オフィスは建設ラッシュである。ホテル代は急騰しており、ビジネスマン向けアパートも数倍に跳ね上がっているようだ。

(2) 日本料理店

ビジネスマンの癒しと情報交換の場である日本料理店は、ヤンゴン市内に100近くある。経営は厳しく1年持たない料理店も多いとのことだ。そこには日本語のフリーペーパーが沢山ある。3年程前から言論統制が解除されたので、新聞や週刊誌が増えた。さらに情報がスマホで拡散するので、情報が洗練され、国民に正確な情報が大量に流れる。途上国特有の不正腐敗防止になることを期待したい。

(3) 観光サービス

ミャンマーの観光資源は多い。北部地方のバガン遺跡は世界遺産である。森の中に金色の仏塔が2000もある。カンボジアのアンコールワットは世界遺産で有名な観光スポットだが、バガン遺跡はまだ余り知られていない。マンダレー王朝はミャンマーの臍のような場所にあり、歴史的遺産も多い。ヤンゴンは英国植民地の中心だった場所で、英国風の建築物が多数残っている。ミャンマー土産としてアウンサンスーチーグッズを買いに政党本部に行ったが、その売場は余りに貧弱だった。スーチー女史の人気は絶大だそうだが、そのような雰囲気はこの旅行滞在中感じることはなかった。

(4) 農業と電力

米は3毛作可能で、GDPの60%は農業である。工業化はこれからだろう。国の真ん中を流れるイラワジ河は、巨大な水亀であり水運になる。水資源は豊富で水力発電が国内電力供給の50%以上を占める。他方で巨大台風も襲来し、防災対策の乏しい地域ではその被害は甚大である。(注；2008年の台風で14万人の死者不明者が出た由)

電力不足は大きな経済発展のネックである。冒頭に述べたように停電は日常

茶飯事であり、産業発展には大きな障害である。今後、水力発電に次いで、火力発電（天然ガスと石炭は豊富、木材などのバイオマス発電も可能）の開発が注目される。

（5）国民性

ミャンマー人の気質を整理してみたい。

① 仏教への信仰

信仰心は強く僧侶は大変尊敬されている。宗教省があり宗教大臣がいる。国内で偉人は、官僚・軍人・仏僧・医者らしい。

② 勤勉が美德

これは多数のミャンマー人からも聞く話であり、旅行滞在中の触れ合いから実感する。農耕文化が基本にあるので、日本人と似ているような気がした。

③ 温厚従順

ミャンマーは少数民族を含めると130余の民族が同居している。これだけ多数の民族が共存しているのは、過去に虐殺政権が無かったことが一因だと思う。

④ アルファベットの発明

国立博物館に2000年前に発明されたミャンマー語のアルファベットが展示されていた。独自の言語（文字）を発明し、維持している国は偉大である。

5、まとめ

ヤンゴン市内での生活環境は日本の真夏と余り変わらない。そしてコンビニにはミネラルウォーターがあり、日蔭に入れば涼しい。イオンなどの先進国型の巨大ショッピングモールはまだ出現していないが、いずれ出現するだろう。すると日本人にとって更に快適になるだろう。

ミャンマーに関する最近の本には、アジア最後の経済的フロンティアと書かれている。その主な理由は、英語圏、人口規模、賃金水準、識字率、温厚従順、勤勉などである。ミャンマーは、この3年で急激に変貌し、成長発展したことは確かだ。

私は、ミャンマーに明るい未来を感じる。長く暗い歴史から解放され、資本主義的（市場経済モデル）な経済が始まったのだ。この経済モデルは格差拡大を伴するが、これをミャンマー国民が上手くマネージしていけるのか、注目していきたい。そして応援していきたいと思った。

（2015.5 西村康裕）